熊本学園大学外国語学部東アジア学科

News Letter 第23号

2020年7月22日発行

□■□学科の最新ニュース！□■□

春学期授業は6月、7月と段階的に対面授業が増えてきました。幸い東アジア学科では、マスク着用、消毒、教室変更等の対策をとりつつ、専門的な科目の大部分を対面授業で行っています。

□巻頭言

熊本学園大学外国語学部教授
外国語学部長　赤井　恵子

熊本地震直後から、折りに触れては眺め心を落ち着かせるよすがとしている画があります。安田靫彦「福沢諭吉ウェーランド経済書講述図」です。三名の慶応義塾生が廊下の欄干のそばに立ち、その中には、新政府軍と彰義隊が戦っている上野の方角を指さす塾生もいます。戦さの砲煙が流れてきているのです。一方、福澤は彼らに背を向け端然と座し、経済書の講義を続けています。この画が持つ静かな緊張感が、災厄のうち続く中、学びを続けようとする人々に深い示唆を与えてくれるような気がします。「コロナ禍」が今後もそう簡単に収まるまいと思われ、さらに大雨が各地を襲っているこの頃、あらためてこの画を『福澤諭吉事典』上で眺めてみました。学部長室から見下ろせる木立の間を、マスク姿で傘を差した学生が登学してきます。

□「一个N」について

東アジア学科准教授　野田　耕司

現代中国語において“一个”（一つ；“个”は物や人を数える助数詞「～個／人」）に代表される数量詞が名詞（N）を修飾して「一个N」の形式をとるのは、単なる計数表示ではなく（もちろんその場合もあるが）、Nで表される事物を個別の実体（個体）として表現するためであることは、中国語の研究者の間ではよく知られている。以前にもこの欄で紹介したが、“门口 有 一只 狗”（逐語訳：玄関　いる　一匹　犬 → 玄関に犬が〔一匹〕いる）のような存在を表す文において、たった一つの事物の存在を言うのにもわざわざNに“一＋助数詞”を付すのはこのためである。事物の数でなく、事物の個別性が問題視されているのである。そしてNの数量が明示されたこのような文の後には、Nを主語（話題）にした文が続くことが多い。

（1）“门口有一只狗。这只狗很温驯。”（……。この犬はおとなしい）

これはまさに“一只狗”の“狗”が類や曖昧模糊とした概念としての「犬」でなく、輪郭のはっきりした個体である「犬」を指していることを物語っている。

日本語では数量表現は文字通り数量の多寡を言うことが多いため、“一个”によるNの個体化機能を知らないと、中国語を日本語に訳した際に数量をことさらに取り立てて表現した印象の文、あるいは不自然な文になってしまう。次の中国語の文は“一个”（“一”が省略されることもある）が多用される構文（出現文、判断文、授与文）である。いずれも（1）の存在文同様、現実世界における事物（N）が参与する事象を表す文であることに注目されたい。

（2）家里来了一个客人。（家に客が一人来た → 家に客が来た）

（3）他是个老实人。（？彼は一人のおとなしい人です → 彼はおとなしい人です）

（4）他给了我一本中日词典。（彼は私に中日辞典を一冊くれた → 彼は中日辞典をくれた。“本”は助数詞）

ただ注意しなければいけないのは、実体とは言い難い目に見えない抽象的な概念的事物も「一个N」で表すことがあるということである。

（5）他有一颗火热的心。（彼は熱い心を持っている → 彼は熱い心の持ち主だ。“颗”は助数詞）

「一个N」の形式をとるか否か、事物（N）を個別の実体と見なすか否かは、客観的な物理上の空間性の有無によって決まるのではなく、話し手・書き手の主観である外部世界の捉え方すなわち認知の仕方による。「火のように熱い」という修飾語を伴った“心”は実体のように捉えられているのである。Nに対する“一个”の付加は任意的な側面もあり、付加しないと文法上ルール違反になるという性格のものでもない。「一个N」の使用に関しては、文法だけでなく修辞・レトリックも関わっていると言えそうである。

□「出張日記」に代えて

東アジア学科准教授　土井　浩嗣

今年１月末からはじまった新型コロナウイルスの感染拡大は、5 月 25 日の緊急事態宣言全面解除で収束したかに見えましたが、今月中旬になって再拡大の様相を呈しています。こうした中、外出自粛で自宅時間が増えたことで、身の回りの物を「断捨離」する人たちが多かったとのニュースを目にしました。かくいう私も授業開始が延期される中、大学研究室の「断捨離」をはじめました。歴史学を専門にしていると、「可能な限り多くの史料（資料）を収集して歴史的事実を解明する」という大義名分をいいことに、多くの物をためこんでしまう困った習性があります。今回の「断捨離」作業では、大学院生時代にコピーした細々とした資料や手書きノートなど懐かしいものがたくさん出てきましたが、思い切って整理するよう努めました。かつて歴史学を学びはじめた 90 年代後半と異なり、デジタル化による研究環境の進化は目覚ましく、また年とともに自らの課題認識も変わりつづけています。韓国など海外はもちろん、国内でも研究出張が難しい状況が依然として続いています。しかし、「コロナ禍」をチャンスととらえて、メタボ気味だった頭と情報を整理したことで、朝鮮農業史の研究を一段階進める良い転機になったと感じています。

□東アジアのあれこれ―中国で最も成功したユーチューバー・李子柒（リー・ズーチー）

東アジア学科教授　李　珊

情報端末の普及が人々の交流の在り方をその根本から変えている。誰もが「自由」に自分を表現し誰とでも知り合うことができる。新しい変化は、「普通の人」が一夜にして「有名人」になり、人々が空間を越えて互いの文化を繋げ合うことができる。

李子柒は 1990 年生まれ。四川の農村の普通の姑娘(クーニャン)で、愛らしくて歌が上手い。刺繍をし、田畑を耕し、果物やキノコを採集し、酒を造り、時に豚を肉にし、家具造りもこなす。自然の食材で作る彼女の料理は、色彩が豊かで美味そうだ。それらの映像は彼女を中国で最も有名なユーチューバーにし世界中にファンをもつ。広大な中国は方言の差が大きく、李子柒の話す四川方言は同じ中国人も聞き取れるとは限らない。まして英語の字幕などなく、外国の視聴者は彼女の話をほとんど理解できまい。

コメント欄は一般に多くの批判で「戦場」のようになるものだが、彼女の場合、内容はどれも穏やかで思いやりに溢れている。視聴者は失われていく素朴な生活風景を懐かしみ、何がしか希望を見出しているようだ。インターネットは文化を越え、立場を越えて、世界を一つに結ぶ力が確かにある。

□新書紹介

荒川清秀『漢語の謎―日本語と中国語のあいだ』（ちくま新書、2020 年）

本書は漢字を音読みした語である漢語が、日本語と中国語でどのように作られ、どのように双方のあいだで行き来したのかを、著者の研究成果をもとにわかりやすく伝えてくれる。漢語はもちろんもっぱら日本語が中国語から取り入れたわけだが、明治以降に日本で作られた「政治」「経済」などの語が、中国語に逆輸入されていったことを知っている人は多いのではないだろうか。本書はそのような漢語の流れ以外に、中国→日本→中国という流れもあったこと、日中の双方で作られた漢語があったことを指摘している。語の軌跡を追うのは大変な作業だが、読者はまるで推理小説を読むかのように漢語の謎に浸ることができる。紹介されている漢語は「文化」や「健康」「空気」など、身近な語も多い。これらは筆者の専門である韓国語でも使われる漢語であり、日中韓、さらにベトナムも含めた漢字語圏の漢語の交流に思いをはせるのはなんとも楽しい。

（東アジア学科講師　黒島　規史）

■編集後記■

春学期は、オンライン授業と対面授業という 2 つの方式の長所と短所を模索する毎日でした。ここに来て痛感したのは、当たり前の対面授業が実は多くの機能を同時に果たしていたという点です。授業の空気から内容の難易度を調整したり、教員と学生、学生同士の直接対話から授業の理解度を高めたり、その利点を再認識しました。試行錯誤の日々は続きます。（ど）

発行者　熊本学園大学外国語学部東アジア学科
編集人　土井　浩嗣（東アジア学科長）
〒860 - 8680　熊本市中央区大江 2－5－1
Tel 096-364-5161（代表）